

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

国内外での仕事を振り返って

関西支部長 高野 登志裕 (昭63年卒)



入社後の仕事の遍歴についてご紹介させていただきます。キャリアの礎となる国内電力事業

今年5月の関西支部総会で支部長を拝命しました高野と申します。

現在は関西電力(株)で海外電力事業に携わっています。京都大学を卒業して新卒で入社した時には将来海外事業に関わるとは夢にも思わなかったのですが、これも世の変化に合わせて会社の事業領域が変化し、自分もその時々新しい機会に巡り合った結果と考えると、その中で色々な仕事を体験することが出来ました。本稿では大学を卒業して現在の会社に

関わった期間も含め、非常に多くの関係者の皆さんと力を合わせて関西エリアの電力供給信頼度の維持に直接関わる仕事に従事することが出来ました。

系統計画に関してはCIGRE(国際大電力システム会議)という国際会議の系統計画に関する分科会に日本代表メンバーとして参加する機会をいただき、世界各国で電力事業の規制緩和が進展し分散型電源が普及拡大する中での系統計画のあり方について海外各国の電力技術者・専門家と議論を交わすと共に、また日本の状況を世界に発信することにも努めました。

国際開発金融機関での経験

30歳台半ばの2000年代初頭には、国際開発金融機関であるアジア開発銀行で働く機会を得て、4年間に亘り南アジア諸国のエネルギーインフラ開発を担当しました。相手国政府向けに主に電力開発プロジェクト用の資金を融資することで国の発展を支援する仕事です。アジア開発銀行の本部が所在するフィリピンのマニラに駐在し家族と共に暮らしましたが、1年の3分の1以上はマニラを遠く離れてインドやパキスタンなどの南アジア諸国に出張する日々を過ごしました。これらの国々は当時まだまだ発展途上で未電化地域が

数多く存在し、電気の届くエリアでも停電が頻発する状況でした。電源の開発と電力系統整備が喫緊の課題であったこれらの国で、日本の電力会社での経験も活かしながら、電力の専門家として多少でも電力開発のお役に立てたのではないかと思います。現地の技術者と直接コミュニケーションする機会が多くありましたが、国の違いや立場の違いはあれど、電力供給という共通の使命、そして電力技術という共通言語により、互いを尊重し理解しながら仕事を進めることが出来たのは得難い思い出です。

国際事業

40歳台後半から現在に至るまで関西電力の国際事業部門で海外での発電・送配電事業の開発・事業運営に従事してきました。国際事業部門では新規プロジェクト開発から既投資事業の運営まで幅広く関与してきました。事業の内容も水力発電事業や火力発電事業から最近では風力発電をはじめとする再生可能エネルギー事業や国際直流連系線まで多岐に亘ります。その中の一つがラオス国における水力発電事業の開発でした。メコン川支流にダム式水力発電所を建設・運営するナムニアップ1水力事業で、関西電力が筆頭株主として事業を主導しました。当初約5

年間は大坂の本店から事業に関わり、その後2018年から3年余りは事業会社の社長としてラオスに駐在しました。ラオスはインドシナ半島の真ん中に位置する内陸国で、国土の約8割が森林と高地です。限られた平野部に人口の殆どが集中しているとはいえ、人口密度は概して低く、首都ビエンチャンを少し離れるとどこかな風景が広がります。ラオスは包蔵水力に恵まれ、水力発電所で発電された電気の多くが近隣諸国に輸出されており、国の輸出額全体の約3割を電力が占めていることから「東南アジアのバッテリー」とも呼ばれています。ナムニアップ1のコンクリートダムの高さは167m、堤頂の長さ(ダムの幅)は530m、発電所出力は290MWの規模ですが、2018年の現地赴任後に建設工事最終段階の様々な困難を乗り越え、2019年9月に商業運転開始を迎えることができました。このような海外での大規模プロジェクトに、小さいながらも現地事業会社の責任者として経営に携わることが出来た貴重な経験でした。

新型コロナ

コロナ禍についても述べておきたいと思えます。コロナ禍が最も厳しかった時期はラオス国内で経験しました。発電所運転開始後間

もない2020年の3月頃からは、ラオスでも日本と同様に新型コロナウイルス感染拡大に伴う対応に追われることになりました。ラオスでは国内での感染者が見つかって間もなく1か月間国内全土のロックダウンを開始し、その後も国内での厳格な移動制限と共に国境を跨いだ移動も厳しく制限し、「鎖国」の状態が1年以上に亘って継続されました。発電所サイトへの技術者・職員の往来、海外からの技術者・専門家の移動が大きく制限を受け、プロジェクトも大きな影響を受けました。私自身もこの往来制限のために、感染拡大から日本に帰任するまでの間の1年半はラオス国内に留まることを余儀なくされました。当時は国外に移動することが出来ずに大変苦労した思い出がありますが、後になって振り返ると、ラオスという国にしっかりと根を張って活動が出来た貴重な期間でした。

終わりに

大学を卒業して約35年になりますが、このうち国内電力事業に約20年、海外での仕事に約15年携わりました。電力に関わるというこゝとでは一貫してここまで参りましたが、様々な分野、地域での仕事に携わることが出来ました。フィールドが変わるたびに多くの人と新しい出会いを経験するこ

とが出来ました。国内においても国外においても、社内外の関係者、当時の上司・部下の皆さんからのご指導や協力があって何とか責務を果たすことが出来たと感じています。新型コロナウイルスが猛威を振るった時期は人とのコミュニケーションを図るのが何かと難しい時期もありましたが、今年の5月で新型コロナウイルスも5類移行し、日常生活に於いてはほぼコロナ前の生活に戻ることが出来るようになりました。何事においても、やはり最後には人と人との繋がりと、今後が大切と感じますので、今後も様々な機会でも人とのコミュニケーションを図っていければと思います。



会員寄稿

囲碁に見る

戦いの基本的な考え方

出口 肇

(平2年卒・中部支部)



1はじめに

洛友会では囲碁将棋の催しがあり、中部支部でも囲碁会が年1回あります。級位者の私は数年前から参加し、ハンディキャップをもたせて大変強い諸先輩方にお相手してもらい、楽しい時間を過ごしています。囲碁は「手談」ともいいますが、口下手な私も言葉を使わずにコミュニケーションをとることができます。

2 囲碁の置かれた状況

日本の将棋人口約500万人に比べ囲碁人口は約150万人で減少傾向だそうです。(ちなみにビデオゲーム人口約5000万人、中国の囲碁人口約6000万人) 囲碁は、古い、ジジイくさいとい

うイメージで、若い人はあまり興味がないと感じます。しかし古来中国では「琴棋書画」といい「棋」は囲碁のこと、身に付けるべき教養のひとつでした。現代でも社会人になって仕事をする上で役に立ち、またリタイヤ後もずっと続けられる趣味になります。

3 戦いの基本的考え方

どのようなことが仕事の役にたつかを、私見ですがお話ししたいと思います。工業は自然科学を応用した産業です。自然科学は自然現象の数学化です。数学は本質的抽象的にさまざまなことを表現できます。それと同様に「仕事」とは経営で、経営は「戦い」に例えられます。囲碁は戦いの本質を私たちに教えてくれます。ここではその基本的な例を2つ紹介しましょう。

囲碁のルール(ルールを知っている人は飛ばしてください)

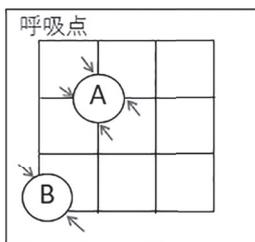


図1 呼吸点

囲碁は、①格子状の碁盤と黒白の碁石を使った2人対戦で、②プ

レイヤーは黒、白どちらかをもつて交互に石を格子の交点に置く、③盤上に置かれた石は交点からでている線(呼吸点という)から息をしており、相手に呼吸点をすべて塞がれると死ぬ。死んだ石は盤上から取り除かれる。④石で囲んだ交点(陣地)が多い方が勝ち、というルールです。ルールはシンプルですが、では一体全体どこに石を置いたら良いのかは難しく、大変奥が深いゲームです。

考え方1「状況に応じて戦い方を変える。」

そりやそうだ、あたりまえ、と思われとおもいますが、少し深掘りしていきます。囲碁では味方の石が多いと有利で、敵の石が多いと不利です。そして自分が有利な状況の戦い方は「攻める」です。では自分が不利な状況ではどのように戦うのでしょうか、「守る」のでしょうか。それを考える上で、そもそも「攻める」とは何でしょうか。解説すると囲碁で攻めるの意味は「利益を得る」ことです。自分が有利な状況ではより多くの利益を得ようとします。逆に自分が不利な状況では相手が利益を得ようとしてくるので、それを削ることが求められます。すなわち「損害を小さくする」が基本的考え方となります。そのための戦い方は「守る」ではなく「サバク」です。

いうことで、当時の難工事の軌跡が感じられると言われております(私もここは行ったことがないため、機会を得られれば是非行ってみたい)。立山黒部の雄大な自然と電源開発の壮大な歴史を同時に体験できるものになると期待されます。

紹介したい名物は、しろえびです。富山県で水揚げされるしろえびは、富山湾特有の海底谷「あいがめ」に生息しており、「かけ回し漁法」で漁獲されており、その鮮やかな薄ピンク色から「富山湾の宝石」と呼ばれるようになりました。主に、寿司、刺身そして唐揚げとして食されております。しろえびせんべいも人気のあるお土産の一つとなっています。岩瀬にある老舗料亭「松月」では刺身から、話題となっている「福団子」まで、しろえびのコース料理を堪能することができます。

そして、石川県。観光名所としては、兼六園、金沢21世紀美術館、金沢城公園、近江町市場、ひがし茶屋街、にし茶屋街、那谷寺、輪島朝市、のとじま水族館などが有名です。また、名物としては、かぶら寿司、治部煮、金沢カレー、ハントンライスなどがあります。

石川県には金沢市をはじめさ

まざまな観光スポットはありますが、紹介したい観光名所は妙立寺(みょうりゅうじ)です。日蓮宗の寺院ですが、加賀藩が外様大名として徳川幕府の監視下にあり、緊迫した状態であったことから、幕府の軍勢に立ち向かう備えのため、寺院群に出城の役目を持たせたとされています。それを背景に堂内にはさまざまに「しかけ」が施されており、「忍者寺」と呼ばれるようになっています。気づかない場所にと落とし穴や隠し階段があるなど、工夫を凝らした構造を楽しめる(?)箇所となっています。境内からの参拝は予約が必要ですが、堂内拝観は予約が不要ですので事前に確認した方がよさそうです。

紹介したい名物は、金沢おでんです。車麩、梅貝、源助大根などの加賀野菜を中心とした地元食材を使用し、各店ごとの出汁を使用して1年を通して食べられるものを「金沢おでん」と呼んでいるようです。金沢では多くのお店がありますが、老舗の一つであるのが片町にある赤玉本店でしょうか。個人差はあると思いますが、車麩、梅貝は定番でおいしいです。

最後に、福井県。観光名所としては、東尋坊、恐竜博物館、

永平寺、丸岡城、越前大野城などが有名です。また、名物としては、越前がに、さばのへしこ、越前そば、ソースかつ丼、ボルライスなどがあります。

紹介したい観光名所は、永平寺です。福井県では定番ではありませんが、曹洞宗の大本山でもありますので、是非一度足を運んでもらいたいと思う場所です。参拝だけではなく、座禅の体験もできることから、経験してみるのがよいと思います。

紹介したい名物は越前おろしそばです。福井のおろしそばは有名でご存じの方も多いと思いますが、醤油ベースのだしが多い中、「塩だし」を使っているお店が池田町にある一福です。初めて食したときには今まで味わったことがないと感じる一方でとても美味しいと感じました。2号店が福井市内にもありますが、是非一度味わっていただきたいと思います。

以上、少し個人的に偏った情報になってしまいました。北陸地方に関する情報を提供させていただきます。北陸地方の方からすると、まだまだお薦めしたい、とっておきの場所、グルメがあると思われるかもしれませんが、個人の勝手な思いで記載しているものとご容赦いた

だければと思います。北陸地方は、これまで都市域から遠方にあると認識されていましたが、北陸新幹線の開通により時間距離が近くなりますので、気軽に北陸地方を訪れていただき、少しでも多くの方にその魅力を感じてもらえるとありがたいと思っております。

ZEHで快適な家づくり

(その1)

苗田徹弥
(昭51年卒・九州支部)



令和三年七月に築十三年の家屋をZEH(ネット・ゼロ・エネルギー・ハウス)として改修しました。そこから二年間、新たな住まいを体感しながら電気エネルギーと室内温度等のデータを収集・考察しました。以下にこのZEH化の経緯と効用等

について述べます。

・ZEH化の概要

平成十九年に新築した家屋(既設OMソーラーシステム、一階床面積108.30㎡、二階同62.27㎡)に対し、

①太陽光発電パネル出力7.5kWの搭載
②エコキュートへの給湯設備変更(都市ガスを廃止してオール電化)

③新築時よりの断熱性能の確認により、以下の四つのZEH基準を満たしました。

- ①外皮基準 U A値:0.54 (ZEH基準:4~7地域0.6以下)
- ②再生可能エネルギー等を除き、基準一次エネルギー消費量から五〇%削減(ZEH基準:二〇%以上の削減)
- ③再生可能エネルギー75kW導入(ZEH基準:容量不問)
- ④再生可能エネルギー等を加えて、基準一次エネルギー消費量から一三4%の削減(ZEH基準:100%以上の削減)

これらのZEH基準を達成する上で最も大切なことは、外皮基準と呼ばれる躯体の断熱性能ですが、当家は新築時に当時では最高の断熱材等を施しましたので、今回のZEH化では設備改修のみで済んだものです。

・太陽光発電量について

太陽発電パネルは三〇枚、計7.5kWであり、毎月平均して七百四十六kWhを発電しています。二階屋根に二〇枚、西側一階屋根に一〇枚であり、午前中はほぼ二階屋根のみでの発電となっていますが、一般的に言われる出力単位kW当たりの標準発電量の月一〇〇kWhと同等です。

・電気消費量について

電気消費量は月平均六百三十八kWhであり、家族は大人二人の生活、夏季冬季の全館二十四時間空調ですが、十二月から二月に多くの電気を消費しています。年間では発電量が消費量を一割ほど上回っており、この消費量の中には電動車EVへの充電が一割程度含まれていますので、ネット・ゼロ・エネルギー・ハウスとしては充分といえます。

・EVへの充電量について

月平均電気消費量六百三十八kWhのうち、EVへの充電量は月七〇kWhであり、約一割をEVへの充電に当てていますが、充電時間は昼間帯の太陽光発電時間としています。本EVは電気だけでなく走るプラグインハイブリッドの車ですが、電動走行モードにおいて、一kWh当たり五km走行します。年間一万km程度の走行があり、その三割ほどを電気で

まかなっています。三千km走行に必要なエネルギーは、ガソリンで二〇〇L(燃費・十五km/L想定)、太陽光発電電気で六〇〇kWhであり、ガソリン単価一六〇円/L、発電単価一〇円/kWhとして、経済性としての差は年間で二万六千円に達します。市内はほとんど電気だけで走行可能ですが、遠出においては充電スタンドが不十分ですので、まだガソリンに頼らざるを得ないのが現状です。

・自家消費率について

太陽光で発電される電気のうち直ぐに消費される割合をいう自家消費率は、家族構成や生活パターンにより左右されます。一般的には二〜三割が標準ですが、本家屋では39.5%となっています。電気消費量の多い冬季において自家消費率は高くなります。

・室温等について

これまでのエネルギー量の使い方に対し、二〇二二年十二月〜二〇二三年二月、二〇二二年十二月〜二〇二三年二月の冬季について、気温の最高・最低、室温の最高・最低(二十四時間全館暖房)を観察しました。この間の平均室温等は表の通りでした。

・ZEH化のまとめ

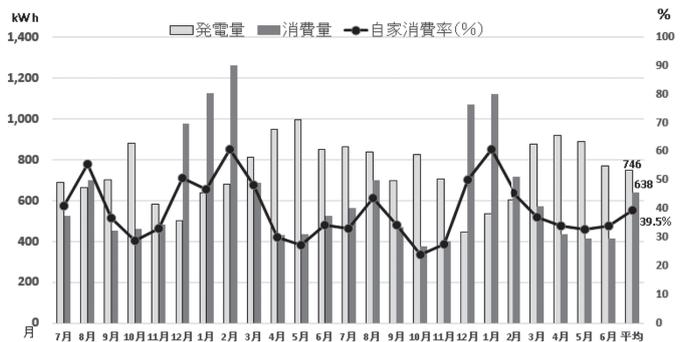
これまでのZEH化によるメリットとしては、健康面では、ヒ-

トショック、結露の無い住環境になり、暑さ、寒さを我慢せずに光熱費も気にしなくて済む快適性が得られました。高断熱・高气密の恩恵です。また、全ての部屋を解放しますので、家の中の動線が楽になりました。環境面では、エネルギーの地産地消により光熱費の削減とSDGs地球環境保護への貢献ができました。災害面では、停電時でも生活に必要な機器が稼働可能となりました。

・書籍、「ZEHで快適な家づくり」の発行

家のZEH化に伴い、そのメリット、デメリットについて書籍「ZEHで快適な家づくり」としてまとめましたので、さらに詳細をご希望の方はこちらをご覧くださいと思えます。また、ZEH化の社会的意義について経済アナリストからご意見を頂戴しています。その模様をYouTube録画として公開していますので、併せてご覧頂ければと思います

太陽光発電量・消費量・自家消費率(2021年7月~2023年6月)



https://www.hanmoto.com/bd/isbn/9784870357617
~ (書籍) ZEHで快適な家づくり ~



https://youtu.be/KC5O-NWzovo
~ 築15年をZEH改修したら暮らしが変わる ~

	平均最高室温	平均最低室温	平均最高気温	平均最低気温
2021年12月~2022年2月	22.6	19.4	11.1	3.9
2022年12月~2023年2月	21.7	19.0	11.6	4.0

支部だより

中国支部総会報告

令和5年5月26日(金)、ANAKラウンプラザホテル広島およびオンライン会議(Zoom)のハイブリッドにて、第70回洛友会中国支部総会を開催いたしました。新型コロナウイルスが5類感染症に移行したことを受け、令和元年以来4年ぶりの集合開催となりました。洛友会本部から木本恒暢先生にご出席いただき、中国地方各地から現地会場、オンライン合わせて19名の会員のご参加をいただきました。

総会は、藤山幹事の開会宣言で開会されました。前田支部長からのご挨拶に続き、支部事務局から支部会員異動状況、令和4年度の支部活動状況・会計決算、令和5年度活動計画・予算案、支部役員を選任についてご説明・ご提案を行い、出席者全員の了承を得て各案が承認されました。続いて、木本先生から洛友会本部、吉田・桂キャンパス含む教室の近況、卒業生の進学就職状況等についてご紹介いただきました。出席者からはご説明内容に関する質問が続き、活発な意見交換となりました。

総会終了後、記念撮影を行い、前田支部長のご発声により懇親会を開始しました。久々に顔を合わせた会員も多く、思い出話や近況報告等、終始和やかな談笑の中で大いに懇親を深めながら会は進み、昭和45年卒業の松井先輩のご発声で、懇親会をおひらきとしました。今年度ご参加いただけなかった方につきましては、来年度是非ともご参加いただきますようお願いいたします。

伊藤 達理(平22年卒)記



四国支部総会報告

令和5年6月9日(金)、高松市内の「J.Rホテルクレメント高松」において、第68回洛友会四国支部総会が開催されました。

教室から長崎百伸教授にご出席いただき、四国支部からは20名の会員が集まりました。総会の冒頭では、小嶋支部長(昭和54年卒)から挨拶があり、今回、会場での集合開催が4年ぶり(令和元年の第64回以来)となったことを受け、これまでの4年間の支部活動の振り返りとして、秋の見学会(令和元・令和4年に開催)、研究講演会(令和3年にZOOMで開催)、近況報告会(令和4年に書面で開催)の思い

出等についてご紹介いただきました。

次に、長崎教授から、本部における令和4年度の主な事業報告と京都大学電気系教室の近況(卓越大学院プログラム、吉田・桂キャンパスの様子、電気系教員の構成と異動状況ほか)について、写真を交えながら丁寧にお話しいただきました。聴講した支部会員は、自らの学生時代を思い起こしつつ、電気総合館や総合研究9号館の内装やエレクトロニクスサマーキャンプの課題など、年々少しずつ変わっていく様子を感じ取りながら興味深く聞き入っております。また、本年も「学年クラス会・支部活動費等の補助」についてのご紹介もいただき、支部内では、「物価高騰の中でも会員間の交流・支部行事の更なる活性化につなげたい」と、同制度の活用についての話題で盛り上がりました。

その後、四国支部幹事から、令和4年度事業報告・会計報告と令和5年度予算案についての説明があり、満場一致で承認されました。

総会終了後は、四宮先輩(昭和41年卒)の乾杯の音頭で懇親会が始まりました。長崎先生や久し振りの友人・先輩とお酒を

酌み交わしながら歓談しているうちに、あつという間に予定の時間となり、最後に恒例となっている「逍遙歌」と「琵琶湖周航の歌」の大合唱で会を締めくくりました。その後、有志一同は同ホテル21階のバーにて、高松の夜景を眺めながら深夜まで親交を深めました。

四国支部では、本年度より、本格的に支部活動を再開させていきたいと考えておりますので、支部の会員様におかれては活動への積極的なご参加、また、本部の皆様におかれましては費用面でのご支援等、お願いいたしておりますので、今後とも何卒よろしくお願いいたします。

最後になりますが、四国支部では実際に四国内お住まいの会員の方を把握するため、支部会員名簿を別途作成・管理しており、支部総会や見学会のご案内も同名簿に基づいてお送りいたしております。もし、四国にお住まいで四国支部事務局からのご連絡が届いていない方がいらっしゃいましたら、四国支部事務局 美馬(※連絡先は会員サイト)の同窓生検索よりご確認願います。まで、お気軽にご連絡ください。また、同名簿に登録させていただきます。

美馬 圭介(平21年卒)記



2023年度

洛友会東北支部総会報告

身の危険を感じるほどの猛暑が続く2023年7月28日(金)、仙台市内の「ホテルモントレ仙台」で、東北支部総会が対面で開催されました。東北支部からは3名の出席で行われました。

総会は伊藤支部長のご挨拶で始まり、議事として2022年度決算報告、2023年度予算案について説明があり、参加者全員で承認されました。

また、伊藤支部長から本部役員会および本部総会出席報告があり、支部交付金増額という新

たな動きについて意見が交わされました。

新規会員が定着することもなく、年々会員数および総会出席者数が減り続ける状況ですが、今後も活動を継続していくことを確認しました。

総会後は一年ぶりの再会を喜びながらの懇親会となり、各自の近況に始まり、昨年も話題になったブラックホールのその後の研究動向について紹介されるなど、予定時間を大幅にオーバーして大変な盛り上がりを見せました。

伊藤 篤(平1年卒) 記

九州支部懇親会報告

令和5年9月22日(金) 18時半より福岡市博多区の八仙閣本店にて、定例の九州支部懇親会を開催しました。久しぶりの夜の開催ということもあってか、合計15名と多数のご参加をいただきました。また、今回もハイブリッド(対面+リモート)で開催し、15名中1名がリモートで参加されました。

会に先立ち、九州支部へ長年ご貢献いただき、本年7月に逝去された岩崎 英男さま(昭22年卒)へ会員一同で黙とうをさげました。総会は工藤幹事(昭

62年卒)司会のもと、能見支部長(昭54年卒)のご挨拶で始まり、出席者最年長の岡さま(昭35年卒)より乾杯のご発声をいただきました。

しばしの歓談後、6月に東京都の学士会館にて開催された洛友会役員会・総会について、能見支部長から報告がありました。役員会では、各支部の活動状況や支部交付金の増額について承認されたことなどについてご説明をいただきました。

参加者全員で酒を酌み交わしながら、終始和やかな雰囲気での懇談は進み、話題は再エネ、若年者の離職、紹興酒、万博など多岐に渡りました。また、東さま(昭54年卒)と池田さま(平7年卒)より令和5年京都大学福岡同窓会福岡講演会のご案内も実施していただきました。楽しいひとときもあっという間に過ぎ、市川さま(平5年卒)の締めで懇親会を締めくくりました。

次回は1月に懇親会を開催する予定です。多数のご参加お待ちしております。

田中仁志(平22年卒) 記



令和5年度懇話会開催のご案内

在校生(学生会員)と卒業生(正会員)の親睦をはかり、在校生に先輩からのメッセージを伝えて激励するために、洛友会と電気系教室との共催で懇話会を毎年開催しています。今年度は左記のように開催されますので、奮ってご参加下さるようご案内いたします。

記

日時.. 令和5年11月24日(金) 15時30分~19時00分
場所.. 吉田キャンパス電気総合館大講義室
懇親会.. 百周年記念時計台2階国際交流ホール

プログラム(予定)...

- 15時30分~ 開会挨拶 電気電子工学科長 松尾哲司 教授
「京都からのイノベーションの創出
-EV・分子エレとベンチャー育成・産学公連携-」
 - 15時35分~ 松重 和美 先生(京都大学名誉教授)
「電気事業の現状と当社の取組み」
 - 16時20分~ 森 望 氏(関西電力株式会社 取締役代表執行役社長・昭61年卒)
閉会の辞
 - 17時05分~
 - 17時30分~ 懇親会(会費:社会人3,000円、学生無料)
- 懇話会HP: <https://www.s-eel.kyoto-u.ac.jp/ja/information/konwakai>
連絡先: 電気電子工学科事務室
電話: 0775-1753-5273
FAX: 0775-1753-5271
Eメール: konwa-kai@kuee.kyoto-u.ac.jp

CUE 50号発行のお知らせ

CUE(電気関係教室技術情報誌)50号が発行されました。目次は以下の通りです。冊子の配布はありませんので、HPよりダウンロードしてご覧下さい。
<http://www.s-eel.kyoto-u.ac.jp/ja/information/cue/>

巻頭言 吉川 潔
「AI技術と大学教育」

大学の研究・動向 電磁エネルギー工学分野
「計算電磁気学とその応用」

産業界の技術動向 小西 哲之
「京大発スタートアップの核融合への挑戦」

新設研究室紹介

研究室紹介

修士論文テーマ紹介

高校生のページ 門 信一郎
「プラズマの光から何がわかる?~プラズマ分光学への第一歩~」

学生の声 飛田 美和
勝野 峻平

教室通信

「令和4年度卒業生の進学就職状況」

編集後記

訃報

昭21	金原 真司	
昭22	岩崎 英男	令5・7・29
昭30	塩田 克弘	5・5・13
昭32	村瀬 誠孝	
昭40	上塚 克己	5・6・25
昭42	橋本 武夫	5・6・20
昭45	数村 勝	5・7・13
昭40 ^修	久行 計全	5・7・23
令3 ^修	原田 彰吾	5・7・15

以上の方々がご逝去なさいました。謹んで哀悼の意を表します。

